現場からの 農村学教室

テーマ 農業・農村の中間支援

平時からつながりを

中川 玄洋 bankup代表理事

筆者は鳥取県で大学生と地域をつなぐNPO法人を経営している。大学院生だった2002年に創業し、20年が経過した。最も長く継続するのが、農業ボランティア派遣事業で県内50地域、延べ500人の大学生を毎年、県内各所に送り活動してもらっている。本事業の継続を中心に農業・農村の中間支援機能について、考えや実践を伝えたい。

農業ボランティアの派遣は「鳥取県農山村ボランティア事務局事業」という県の委託事業として実施している。農業・農村に触れたい大学生と水路維持などの共同作業の担い手を求める地域をマッチングする事業で、私たちは「つなぐ」「翻訳する」「伴走する」という3段階を大事にしている。

「つなぐ」は文字通り活動と人材をつなぐもので、大学生に農村での作業を情報発信し希望者を募る。近年では学生チームができており、その中で希望者を募る。

「翻訳する」は、大学生と農村集落の人たちは世代や過ごしてきた時間が異なるため、互いを理解するための情報の補完を指す。例えば農村の人は「大学生＝時間がある、暇」というイメージを持つことが多いが、今の大学生は大変忙しい。授業・サークル・アルバイトだけでなく、インターンシップなど、かつてよりもすることが増えており、限られた時間の中から地域活動に参加している。

そこを理解してもらうために、地域の人に話したり、逆に学生には地域の方にはあいさつを率先してすることや、たくさんご飯を食べると喜ばれることなどを伝える。両者の認識がそろうことで、地域での企画も可能になる。

「伴走する」は、やってみないと分からないことも多いため、一緒に作業をしたり、企画があれば現地に赴いたり、環境を整える支援も行う。例えば、一緒にご飯を食べる機会は重要だ。ボランティア作業中は話す機会が少なく、食べながらのコミュニケーションは地域や人柄を知る機会になり、「○○さんのために作業に来たい」という気持ちになる。

今年、鳥取大学の学生が調査したところ、地域の人とのコミュニケーションやご飯を食べる機会が、結果として活動を継続する要因になっていた。

些細なことだが、こういったことを地域側に説明し、無理のない形でやり方を一緒に考えたり、大学生側に地域の声を届けたり、足を運びやすい環境づくりをしたりしている。

02年から地域派遣を続けた結果、大学生を主体とした企画も生まれだし、24年2月現在、延べ40人を超える鳥取県外出身者が大学卒業後も県内で暮らしている。住んでいる地域も県内11市町村に広がり、面的に地域の仲間が増えた。

なかがわ・げんよう　1979年生まれ、静岡県出身。大学進学を機に鳥取県へ。大学院在学中に現在代表理事を務めるNPO法人の前身である「学生人材バンク」を設立し、大学生と地域をつなぐプロジェクトを実施。内閣府地域活性化伝道師、ディスカバー農山漁村の宝特別賞受賞（2022年）。

長期で地域課題解決

農業ボランティアはもともと、田んぼの水路維持などのメンテナンスを目的として始まり、地域の担い手を定着させる機能に発展した。この経験から、中間支援組織は一つの動きを軸に、長期的に地域課題を解決していく目線が重要と感じる。地域と関係性をつくり、外の人材の役割を見つけ、主体的に参加してもらう仕組みにしていく。地味でもコツコツしたことを続ける力も必要だ。

筆者のNPO法人では、農村ボランティアの派遣で培ったノウハウや関係性を展開して、中小企業経営者の期間限定の右腕となる長期実践型インターンシップや、複業人材のマッチングも行っている。課題を聞き出し、人材がモチベーションを持って取り組めるプログラムを設計する、人を連れてくることができる。人口減少社会の地域にとって、このような中間支援機能は今、各所で求められている。

水路を清掃する学生ボランティア（鳥取県三朝町で）

課題は、この機能がまだ仕事としては認識されていないことだ。ノウハウも筆者のような創業者だけが持っている状態で、人材育成に還元しきれていない。価値を捉えにくい仕事だが、この機能を本業にできる人、副業でもお金をもらって担える人の多い地域が、今後生き残る可能性が高いのではないか。

私たちもノウハウを抽出しカリキュラムを作るなど、代表者のお家芸にせず、それを伝え学ぶ機会をつくって育成の面を整えるように、仲間と動いている。

援助受ける力も重要

最後に「受援力」について触れたい。支援側が増え、ノウハウ共有や教育の仕組みなどが整えば農村の課題は解決するかと言われると、そうではない。地域側が外部と一緒にやる意識を持ち、一緒に協力して動いた経験を積むこともポイントだと感じる。

その力を、筆者は「受援力」と呼ぶ。外部から受け入れて一緒にやる、上手に頼る能力や歩み寄る目線、相手に委ね過ぎない意識であり、その力は有事の際にも発揮される。

被災農地の復旧に取り組む学生ボランティア（同）

近年、台風や豪雨などが増えてきている。鳥取でも豪雨被害が出た時があったが、ボランティアを受け入れていた地域では土砂で水路が埋まった時、ヘルプの電話を事務局の筆者ではなく、現地に足を運んでいる学生リーダーにかけた。

平時からのつながりで頼る人が思い浮かび、声がかけられる状況ができていた。平時につながっていないと、大変だと分かっていてもなかなか声をかけにくい（被害側も支援側も）。平時に互いを知り、関係性をつくり、一緒に活動する中で有事の際に声をかけるきっかけが生まれる。人口減少社会においての農村地域の生存戦略なのかもしれない。

能登半島地震では、年始から能登の友人が中間支援組織として、いろいろな外部人材をつないでいるのをサポートしているが、「受援力」や地域外の人材と一緒に行動した経験の差が出ていると感じている。ボランティアに限らず、人と人をつなぐ役割を生み出し、鳥取の仲間を内外に広げていきたい。